

## 宇部の長生炭鉱と戦時中の朝鮮人労働者\*

李 修京\*\*・湯野 優子\*\*\*

外国語・外国文化研究講座\*\*\*\*

(2007年8月31日受理)

### はじめに

地方の炭鉱産業が日本の近代社会をいかに支えてきたかは周知の通りであるが、当時の零細炭鉱で働いた労働者の事故・水非常（炭鉱での水没事故、詳細は後述する）問題は歴史の風化が進む一方、今なお総括に至っていないことが多い。我々が享受する現代社会の豊かな生活や、政治家のスローガンに用いる「美しい」国の内実は悲しいほど凄惨な先人の犠牲をも伴ったことを認識しなければならない。過去に目を向けて歴史の事実を確認し、被害者との蟠りや怨嗟を払拭する誠実な総括作業を通して、戦争のない平和社会の具現を实践することに未来が存在するのである。劣悪な状況の中で非人間的な生活が強いられて、歴史に葬られた未曾有の犠牲を黙認することは再度の不幸を招くことになりかねない。不条理で暗鬱な戦時中の実態を知ることこそ、不幸な歴史の繰り返しを阻止できる英知に繋がるのである。その趣旨の一環として、本稿では戦時中の日本の炭鉱産業について考察しつつ、歴史清算の問題を内包している炭鉱事故の実態について触れてみる。

戦争の長期化・激化によって多くの日本人が戦場に駆り立てられ、戦時労働力の不足は植民地、とりわけ朝鮮人労働者などで補充された。その際、山口県は大陸への玄関口と言われ、宇部市は朝鮮半島と近い臨海炭鉱地という地理的条件から炭鉱の活性化が促進されたところであり、朝鮮からの戦時労働者も多く動員・配置されたところである。本稿では宇部市の炭鉱の中でも水非常事故によって現在も遺族への遺骨返還が行われていない長生炭鉱を中心に考察し、戦時中の劣悪な労働実態と非人道的な事故処理について検証してみる。

本稿で扱う長生炭鉱がある宇部（現・宇部市）は山口県の南西部に位置し、明治期以降に炭鉱産業で盛況した町である。第一次世界大戦によって日本炭鉱業は空前のブームとなり、宇部炭鉱業も沖ノ山、東見初の二大炭鉱を頂点に海底大炭鉱時代を迎えた<sup>1</sup>。しかし、1910年3月の戦後恐慌によって日本炭鉱業は不振に陥り、中小零細炭鉱は休業縮小を余儀なくされた。1912年には明治天皇が死去し、11月に乃木希典の哀悼会が宇部小学校で行われるなど、政治的に慌ただしさを表す中で、翌月の12月に第二沖ノ山炭鉱が創業（渡辺祐策）を開始した。しかし、東見初炭鉱で水没惨事が発生し、235人が死亡する大事故となった<sup>2</sup>。1917年には宇部で規模がもっとも大きかった沖ノ山炭鉱で初の賃金値上げのストライキが起こり、翌年の8月16日には米騒動によって軍隊が出動し、炭鉱夫の集団に実弾を発砲して13人が即死した<sup>3</sup>。そのような社会雰囲気の中で1922年に笹山炭鉱が創業（藤井友吉・藤川喜太郎）。当時の宇部では宇部紡績も稼働していたが、あまりの過酷さに毎月20人前後の女工たちが逃亡をはかったことも工場生活の哀史を物語っている<sup>4</sup>。

1930年には沖ノ山炭鉱が赤字となり、沖見初炭鉱が休業する中、翌年には末吉炭鉱所東神原炭鉱が開坑するなど、炭鉱産業は浮き沈みの中で戦争を迎えるようになるのである。

宇部地域には上記の炭鉱のほか、上の原炭鉱（1910）、常磐炭鉱（昭和22年）、床波沖炭田や、周防炭鉱、

---

\* The Cho-Sei coal mine in Ube under WW II, and Chosen labors / YI Sookjung, YUNO Yuko

\*\* 人文社会科学系外国語・外国文化研究講座所属

\*\*\* 朝日新聞社山口総局所属

\*\*\*\* 東京学芸大学（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

新浦炭鉱 (1919年)<sup>5</sup>、長生炭鉱 (1914年) などが開業し、宇部炭鉱町を作っていた。だが、これらの炭鉱は戦時中の軍需資源として栄えるものの、戦後の日本政府のエネルギー需要構図の転換に伴い炭鉱も減り、1967年には最後の炭鉱が閉山となった<sup>6</sup>。そして、現在は人口17万9千人を抱えて瀬戸内海沿岸地域で有数の臨海工業地帯を形成しつつある<sup>7</sup>工業都市になっている。

以上の宇部の炭鉱に関する概括を踏まえながら、日本の炭鉱産業の中での長生炭鉱の実状に接近してみることにする。

## 1. 日本の炭鉱産業政策と植民地労働者動員

第一次世界大戦によって日本は炭鉱業開発に拍車をかけるようになった。北海道の石狩炭田や釧路炭田、本州東部の常磐炭田、本州西部の宇部炭田、九州の三池炭田、筑豊炭田、高島炭田などが開発され、北海道の石炭埋蔵量は全国のおよそ50%を占め、九州と並ぶ大産炭地となった<sup>8</sup>。日本国内での炭鉱業開発に伴う炭田拡大化が要求される中、大陸経営による植民地拡大化とともに植民地における石炭産業をも展開した。特に戦時期になると日本の大資本による大規模な開発が進められ<sup>9</sup>、生産高、鉱夫確保が求められるようになる。このように日本国内外からの鉱業開発が進む中で戦争突入になり、さらなる軍需・労働力の確保が課題となってきたため、「日本は中国侵略ならびに太平洋戦争を遂行するため国家権力により大量の朝鮮人を日本および朝鮮内の炭鉱、鉱山、軍需工場、軍事施設工事などに、また戦場に軍人・軍属・「軍慰安婦」として強制連行し、多くの犠牲者を出した。」<sup>10</sup>のである。

特に1937年の日中全面戦争によって準国家総動員態勢へと移行するにつれ、1938年4月に「国家総動員法」、1939年7月には「国民徴用令」が公布され、企画院の「労務動員計画」のもとで大々的な戦時動員が始まったのである<sup>11</sup>。国策として掲げた戦時下労働力動員は朝鮮人、中国人を日本内地、樺太、南方の各地に投入したが、駆り集め方が強制的であったため、強制連行労働者と称している<sup>12</sup>。これらの日本への連行労働者や軍関係労働者（従軍慰安婦を含む）などについて朴慶植は百数十万を越える龐大なものであり、その死傷者の数も多く、中でも金属鉱山、軍需工場、土建工事場などでの朝鮮人死傷者を合わせると1940～45年までは30万人を下らないと述べている<sup>13</sup>。栄養失調と長時間労働による疲労のため、注意力は散漫になり、危険な仕事場での事故は、同じようなところで働く日本人労働者に比べて、はるかに高率<sup>14</sup>だったのである。

なお、朝鮮半島における労働者の募集に至る手順は、「事業場の申請数決定→府県長官宛募集申請→厚生省査定→総督府の募集すべき道の割当→厚生省→府県長官→事業場許可書受領（この間5～7ヶ月を要す）→募集員渡鮮→総督府→指定された道庁→指定郡庁→指定面事務所→面事務所当局、区長、警察署又は駐在所面有力者の協力の下に募集を行ふ。」<sup>15</sup>であり、その際、いわゆる官斡旋か、内地同様のビラ・座談会・個別訪問等による宣伝募集を行う場合が多く、中でも後者の内地における募集方法が多いとされている<sup>16</sup>。

## 2. 炭鉱町の山口県宇部

本州でもっとも九州よりの「山口県は、フィリピン海プレートが北西方向へ活発に毎年約4cmの速度で沈み込んでいる境界（南海トラフ）から約300km内陸側に位置し（中略）大変ゆっくりではあるが、たえずその姿を変えつつある。」<sup>17</sup>地形をもっている。

中でも宇部は海岸部に炭鉱が集中し、厚東川、有帆川、厚狭川に接しており、石炭の輸送には大変便利であった。また、海岸が遠浅であったため、石炭採掘のための干拓や海底採掘も容易であり、地理的条件に大変恵まれていた。

宇部の石炭がいつ発見されたのかについての記録は残っていないが<sup>18</sup>、常盤湖の湖底に立坑跡があることから、常盤湖が作られた元禄8年以前には既に石炭が掘られていたとされる<sup>19</sup>。当時は露出している石炭を掘る程度の小規模な採掘であった。採った石炭は薪の代用品として使用されたのだが、後に塩田の燃料として石炭の需要が急増するのである。

明治に入ると毛利藩は石炭局を設置し、炭鉱を直接経営することにより、石炭の生産及び販売の管理を始めた。石炭局は新しい技術の導入に積極的に取り組み<sup>20</sup>、宇部の炭鉱は脚光を浴び始めた。しかし、明治5年の「鉱山心得」、翌6年の「日本坑法」の広布により、石炭局は廃止され、石炭の採掘権が一般に開放されるようになった<sup>21</sup>。

石炭採掘権が民間に移行されると、宇部の鉱区が他村の手に渡ったため、宇部の人々は「斤先」と言われる高い権利金を支払いながら採掘をしなければならなかった。江戸時代最後の旧領主である福原芳山は明治に入ると、その窮状を見かね、採炭権をすべて買い戻し、村人に安い斤先で採掘させた。その後、芳山は回収した鉱区を無償で宇部共同義会<sup>22</sup>に譲った<sup>23</sup>。芳山は地元の資本による炭鉱業の礎を築き、後の炭鉱業の発展に大きく貢献した人物として評価されている。

なお、明治後半になると、日清戦争の影響により炭鉱業は好況に見舞われ、多数の炭鉱が開坑された。また、需要の増大と蒸気力、蒸杵の利用により地中深く採掘をすることが可能になった。しかし、日清戦争が終結すると石炭の需要は一転して急落、石炭の埋蔵量も乏しくなり、炭鉱の経営も悪化の一途をたどるようになった。しかし、1904年の日露戦争の勃発による好況、及び海底採掘により、一時落ち込んだ炭鉱業も再び息を吹き返す。宇部において海底の採掘が実質的に取り入れられたのは1912年（明治45年）以降であるが、それ以後宇部の出炭量は倍増する。また、宇部の本格的な炭鉱経営が始まったのもこの頃である。当時の主要炭鉱をまとめると以下の通りである。

表1 宇部の主要炭鉱

	炭鉱名	経営者	資本金
明治30	沖ノ山炭鉱	渡辺裕策	4万5千円
36	神原炭鉱	渡辺裕策	(記載無し)
40	西沖ノ山炭鉱	高良宗七	6万4千4百5十5円
41	東見初炭鉱	藤本閑作	8万6千円

(注：『石炭時報』、山口県サイトなどより作成)

後の宇部の石炭業を支える宇部興産の前身となる沖ノ山及び東見初炭鉱であるが、当時は沖ノ山、神原、西沖ノ山が宇部炭鉱の中心であり、東見初は未だ創生の域を出ていなかった。炭鉱を中心としたさまざまな業種の発展とともに宇部の人口は著しく増加し、炭鉱周辺には集落が形成されていく。

大正に入ると本格的な海底採掘時代を迎え、宇部の炭鉱業は急成長し、宇部の産業基盤として定着する。また、1904年の第1次世界大戦の勃発は炭鉱産業界に空前のブームをもたらした。

大正の年間採炭量を見てみると、大正元年には約61万トン（炭鉱数37）であった生産量は同6年には100万トンを超え（炭鉱数35）、15年には150万トンを超えている（炭鉱数18）。また特徴として、大正元年には50%であった海底炭鉱が15年には90%を占めており、海底採掘への依存が挙げられる。炭鉱数は減少しているが、これは小規模炭鉱の吸収及び合併などの再編が行われたためであり、大規模の海底炭鉱が主流となっていく<sup>24</sup>。

この頃の主要炭鉱を見てみると、大正元年に第2沖ノ山炭鉱、続いて東沖ノ山炭鉱開坑し、宇部炭鉱の中核をなしていく。その他にも第2神原、新長澤、東潟、長生、沖見初、濱神、沖長、西見初、新浦、新長生などの炭鉱が次々と開坑される。しかし、大正末期になると戦後恐慌の煽りを受け、炭鉱業にも陰りが見え始め、小規模炭鉱は休閉山を余儀なくされ、炭鉱数は最盛期の半分に減少する。

第1次世界大戦後の恐慌以来の日本は慢性的不況に陥り、昭和に入っても景気は回復するどころか、悪化する一方であった。さらに昭和2年の金融恐慌、昭和4年の世界的恐慌により、産業は萎縮し、工場閉鎖などが相次いだ。しかし、昭和6年には満州事変の勃発により、産業界は活況に転じ、石炭の需要も増していく。昭和初頭には新たに開坑する炭鉱は殆どなく、大正以来炭鉱数は18～19を保持していた。この頃の主要炭鉱の稼業状況を見てみると、宇部では東西に対峙する沖ノ山と東見初の2大炭鉱、そして小野田に新しく開坑した新沖ノ山炭鉱（昭和14年）の3海底炭鉱が宇部の出炭の80%を占めている<sup>25</sup>。

第2次世界大戦が始まると、さらに石炭の需要は増し、石炭の生産量は15年に最高の423万トンを記録した。また、同年には沖ノ山炭鉱、宇部窒素、宇部セメント、宇部鉄鋼所の企業合同により、宇部興産が株式会社として新発足し、積極的な経営に乗り出した。さらに、中小規模の炭鉱も莫大な資本が投入され、次々と開発が進められた。その数は15年には最高の59鉱に達し、昭和初期と比較すると3倍以上にも上る<sup>26</sup>。

しかし、敗戦後は次第に主要エネルギー源が石油へと移行され、石炭の生産は減少していくのである。前述しているように、1967（昭和42）年までに市内の炭鉱はすべて閉山し、工業の主力は化学・建設資材・機械・金属等へ転換した。なお、上記の宇部炭田関連の大まかな動向は以下の関連年表Ⅱから確認することができる。

表Ⅱ 宇部の炭鉱関連の年表

		宇部炭田の主な出来事	世の中の動向
	1469		日本で最初の石炭発見（三池炭田）
	1645	山口・舟木炭の名が「毛吹章」に記載（山口最古の資料）	
	1778	瀬戸内地方で、製塩に石炭を使用	
明治 元年	1868	毛利藩が石炭局を設置し、石炭の生産・販売を管理	明治維新
4	1871		「鉱山心得」発布
5	1871	宇部で福井忠次郎が石炭会社を設立、厚狭郡の鉱区を治める	「日本坑法」発布
9	1876	福原芳山が福井忠次郎から炭鉱借区権を買い戻す	
19	1866	宇部共同議会在結成され、石炭鉱区の統一管理を実施	
24	1891	宇部で海底採掘が始まる	
27	1894		日清戦争
29	1896	宇部で初の蒸気機関車が石炭輸送に導入される	
30	1897	沖の山炭鉱創業	
37	1904		日露戦争
41	1908	東見初炭鉱創業	
大正 元年	1912	沖の山炭鉱電化	
3	1914	東見初炭鉱で水没事故（235名死亡） 宇部炭田最大の事故	世界第1次戦争、三菱方城で市場最大の炭鉱事故（678名死亡）
4	1915		監督署が「海底採掘制限事項」を通達
10	1925	新浦炭鉱で水没事故（34名死亡）	
昭和 6	1931		満州事変

10	1935	本山炭鉱創業	
14	1939		女子坑内労働の特例公布
16	1941		太平洋戦争
17	1942	長生炭鉱で水没事故（183名死亡）／宇部興産(株)設立	終戦／労働組合法が公布され、炭鉱に労組結成が相次ぐ
20	1945		
22	1947	昭和天皇が沖の山炭鉱はじめ宇部工業地帯を視察	憲法施行／臨時石炭管理法公布
27	1952		各地で炭鉱におけるストが相次ぐ 石炭不足で重油に転換が始まる
30	1955		石炭鉱業整備事業団、石炭鉱業合理化臨時借地法公布により非能率炭鉱が買い上げられる
33	1958		景気後退
38	1963		三井三池三川鉱で炭塵爆発（458名死亡、戦後最大の死者）
40	1965	西沖ノ山鉱業所閉山	
42	1967	宇部鉱業所閉山	
48	1973		第1次オイルショックで石炭が見直される

（出典：炭鉱写真編集委員会「炭鉱の年表」『有限から無限へ 炭鉱』宇部市，1998年，249～258頁及び「管内重要害災害推移表」『山口炭田三百年史』広島通商産業局 宇部石炭支局，1969年，231～262頁より作成。）

このように宇部炭鉱の発展は地理的条件や宇部独自の経営形態など様々な要因が挙げられるが、最も大きな要因としては表Ⅱで述べているように、幾度にわたる戦争の特需に伴う石炭のニーズに対応した結果、このような発展があったと言っても過言ではなからう。

### 3. 炭鉱を支えた労働力

昭和に入り全国でも有数の炭鉱都市に発展した宇部は、当時、大小約80の炭鉱が存在した。しかし、満州事变以後、戦線の激化により石炭の需要が高まるに連れ、男子は戦地に駆り出され、炭鉱の労働力不足が深刻な問題となる。その労働力不足を補うため、徴用労務者、学徒動員、そして1939年以降は「募集」、「徴用」、「官斡旋」などの名目で朝鮮半島の人々や中国人が日本に連れてこられ、その労働力として補われた。

『山口炭田三百年史』によると終戦直前の昭和20年には約1万2千人の朝鮮人労働者をはじめとし、中国人、捕虜など1万4千人が炭鉱に従事しており、宇部炭田における外国人炭鉱労働者は44%を占めていた<sup>27</sup>。戦争捕虜には東南アジア方面で投降したイギリス、アメリカ、オランダ兵などがいたことが分かっているが<sup>28</sup>、これらの人々がどのような経緯で動員され、どのような処遇を受けたかについては未だ十分論究されていないため、今後の課題である。なお、前述したように、労働力不足を補うために朝鮮人労働者は重要な役割を果たしたのだが、日本政府は、彼らの取締りと戦争遂行に必要な労働力確保のため昭和14年（1939）に「内鮮融和」を目的とした中央協和会<sup>29</sup>を結成し、各地方にもそれを設置した。

釜山と下関を結ぶ連絡船のある山口県は全国でも有数の朝鮮人居住区であった。そのため翌年には山口県協和会が結成され、県下の警察署単位に各支部が置かれた。

炭鉱労働者を数多く必要としたことから、「集団移住」を積極的に受け入れていた宇部は、県下でも朝鮮人の数が圧倒的に多かった。そのため、協和会設立以前から類似した形態の独自組織を持ち、積極的に活動を行っていた。この組織は県協和会宇部支会の設立（昭和15年）を契機に翌年統合し、県下最大の支会となる。山口県協和会は県内に居住するすべての朝鮮人を会員とし、皇民化を図るため定期的に協議会を開き、朝鮮人の日本人化教育を徹底した<sup>30</sup>。

当時発刊されていた新聞『大字部』<sup>31</sup>の昭和14年10月1日付には、「最近宇部を訪れる人々から「半島人が多いネ。だが割合に小ざれいぢやないか」という話をよくきかされる。」という記事とともに、昭和11～13年度の在宇部朝鮮半島の人々の数が表記され、毎年1000人以上の移住者がいたことを示唆している。具体的な人数としては、11年度に6200人、12年度に7100人、13年度に8000人となっている。因みに、『大字部』が発刊された昭和14年度は1万人を越すものと見られ、この数は当時の宇部の人口の10%に相当した。

宇部に朝鮮からの労働者が多かったのを物語る出来事として1936年のいわゆる‘東洋の舞姫’と評価された崔承喜<sup>32</sup>公演を掲げることができる。宇部の芸術同好会は自分らが企画するレコードコンサートの基金募集のために世界的な舞踊家であった崔承喜の公演を企画したのであり<sup>33</sup>、2・26事件の不安な余韻が残る3月29日の公演は盛会となり、「同国人だということで鮮人も多数やって来た（中略）舞踊が終わる毎に万雷の如き拍手を送って居た。」<sup>34</sup>のである。朝鮮に帰る日を早めて宇部に寄ったのだが、崔承喜が宇部にまで足を運んだことはやはり多くの同胞が働いており、励ましたい一心もあったと考えられる。それほど宇部には朝鮮からの労働者が多く働いていたことが簡単に推察することができる。

なお、昭和14年度の職業を見ると、知的な職業に就いた人が13人、商業が200人、農業が1人、炭鉱労働者3300人、その他の労働者が1036人（このうち婦人労働者500人）となっている。これを見ると、圧倒的に労働者数が多く、中でも炭鉱労働者多いかがわかる。換言すると、宇部炭鉱では朝鮮半島からの労働力に依存していたと指摘することができる。また、同紙では「半島人が労働殊に炭鉱労働に適してゐるといふのは、一般にガンジョウで労働力が盛んときてゐる上に、比較的低い賃銀で働くという特徴があるからだ。」、また「當市が彼等に求めてゐるのは技術を要しない仕事だ。」とあり、彼らが日本人よりもさらに劣悪な環境で労働させられていたことは簡単に推察することができる。

そのような環境の下で強制的に労働させられていた彼らは非道な処遇に耐えかね、しばしば闘争を起こしている。「集団移住」の名目の下、特に朝鮮人労働者を数多く受け入れていた炭鉱は、主に東見初、沖ノ山、沖宇部、長生であった。

宇部の朝鮮人労働者は既に大正時代から移住が行われており、大正7年の米騒動<sup>35</sup>にも沖ノ山や東見初の炭鉱労働者も騒動に加わっていた。東見初炭鉱では昭和17年、朝鮮人募集要員258人が従事していたが、朝鮮半島の中部地方である忠清南道出身者45人が、「隊長」の無断欠勤者殴打事件をきっかけに炭鉱事務所に押しかけた事件や、募集条件が守られていないことに対して朝鮮人労働者全員が「怠業」に出た事件があった。その他、日本人労務係の暴言に対し、労務係を殴打する事件（沖ノ山）、日本人労務係の暴行に対し、労務係を殴打する事件（沖宇部）があり<sup>36</sup>、長生炭鉱においても同内容の事件が起きている<sup>37</sup>。

また、当時の長生炭鉱労働者の証言<sup>38</sup>から、朝鮮人労働者は鉱夫としてだけではなく炭鉱の経営者側にも加わっており、同胞が逃亡した際には、朝鮮人の責任者が殴らされていた事も明らかになっている。彼らは日本人からだけでなく、同胞からも差別される状況に陥っていたのである。当時の日本において社会的に弱い立場にならざるをえなかった人々が劣悪な環境の下、過酷な労働を強いられたのである。

朝鮮人労働者と炭鉱経営者の間は常に緊張・対立関係にあり、争議が絶えず、また「逃走率」も高かった。『朝鮮人強制連行調査の記録 中国編』は内務省特高課の調査に依拠し、1939年の全体の移住者の数は19,135人で逃走者は429人の平均2.2%の逃走率であるが、山口県においては移住者238人に対し、51人が逃走しており、21%と異常に高い逃走率を見せている。宇部の炭鉱労働がいかに過酷であったかを物語っている<sup>39</sup>。

宇部の炭鉱の発展の背景には戦局の悪化により、常に労働力不足を朝鮮人労働者によって補填することができたことが大きな要因である。

#### 4. 長生炭鉱の規模と実態

山口県吉敷郡西岐波村1456番地に所在した長生炭鉱は1914年に磯辺啓作によって開鉱された海底炭田だが、後の1940年に山田新松に引き継がれ、頼尊淵之助によって経営されるようになった<sup>40</sup>。炭鉱は新浦炭鉱の海岸沿いの南に位置した。最盛期の昭和15年には992人が働き、15.3万トンの石炭を産出した<sup>41</sup>。また、朝鮮人労働者が多いことから「朝鮮炭鉱」とも呼ばれていた。また、鉱内外約1000名の人員を擁し、石炭の年産約16万トンを生産した。以下の表Ⅲから長生炭鉱は中規模の炭鉱の部類に入ることがわかる。しかし、1942年2月3日午前9時半頃、海岸坑口から1キロの沖合いの坑道が崩れて海水が滲出し、183人の炭鉱労働者が死亡した。犠牲者183人のうち7割（136人）が朝鮮半島出身者であった。犠牲者の遺体は引き上げられないまま、45年に閉山した。現在はピーヤと呼ばれる直径3～4メートルの円筒形コンクリートが2つ、海岸から数百メートル沖の海面に突き出している。

当時の炭鉱の中でも長生炭鉱は不安定な基盤に海底炭鉱を設けていた。その背景にはそもそも問題が多い炭鉱環境があったのである。『山口炭田三百年史』には「長生炭鉱 昭和14・2・6 坑口より1010m 以層坑道 死者183 海水侵入」と述べられている。ここの2月6日は誤植で、2月3日がほとんどの記録に残っている。

1942年当時の長生炭鉱では、坑口より沖にピーヤ（通気口）を経て1,000米余の地点で南南西の方向に104度の角度で一線に延びる坑道を電車坑道と称した。この炭鉱は創立当時から朝鮮半島との関連があり、朝鮮との関係について滝本益雄という朝鮮事情に詳しい人が労働者募集を担った<sup>42</sup>。そのため、長生炭鉱には多くの朝鮮出身者が働き、朝鮮の人たちは若い人や家族が200～300人ほど群がって炭鉱のある海岸近くに住んでいたが、中には不足する食糧や野菜を分けてほしいと近所を訪ねることも多々あったものの、朝鮮出身労働者は危険視・度外視され、村からは敬遠されていたという<sup>43</sup>。

なお、当時の主要炭鉱の規模は以下の表Ⅲから概観できる。

表Ⅲ 昭和15年の宇部の主要炭鉱の規模

	炭鉱名	生産量	労務者数	鉱業権者
第1級炭鉱	沖の山	1,239,381	5,560	沖の山炭鉱 KK
	東見初め	1,005,599	4,515	東見初め炭鉱 KK
第3級炭鉱	本山	224,566	1,673	宇部鉱業 KK
	長生	153,309	992	山田新松
第4級炭鉱	沖宇部	112,517	853	篠崎留吉

(注：福岡鉱山監督局「級別、県別、炭鉱別、炭種別昭和15年出炭量表」『山口炭田三百年史』より作成)

炭鉱では安全対策が不十分な環境での作業であるため、大規模な災害、例えば水没事故の他にもガスや爆発、火災、落盤事故などの発生率が高い。海底炭鉱となると危険度はさらに高まる。宇部炭鉱は明治20年頃から海底採掘が始まるが、この辺りの海底炭田は遠浅の海として知られており、特殊条件によって採炭許可が出ていた。そのため、海水侵入による水没事故が数多く発生し、多くの犠牲者を出している。

このように宇部炭田の発展は海底への挑戦の歴史と言っても過言ではない。なお、宇部における主な炭鉱災害をまとめてみると表Ⅳの通りである。

表Ⅳ 宇部における主な炭鉱災害

	炭鉱名	死者	事故の原因
明治 25	築島	4	出水
33	三炭組	25	出水
38	三炭組	25	出水による海底陥没

	44	三炭組	75	出水
大正	4	東見初	235	海水侵入
	10	新浦	34	海水侵入
	11	東沖ノ山	1	留水, 溢水
昭和	4	東見初	5	ガス爆発
	5	西沖ノ山	20	爆風
	8	西沖ノ山	7	出水
	8	沖ノ山	4	堅坑揺杵の倒壊
	8	東見初	5	ガス爆発
	12	沖ノ山	6	落盤
	14	沖ノ山	9	ガス爆発
	17	長生	183	海水侵入
	18	本山	6	落盤

(出典：「管内重要害災害推移表」『山口炭田三百年史』広島通商産業局 宇部石炭支局，1969年，231～262頁より作成。)

大正4年の東見初の事故は宇部炭田最大の事故というだけでなく、国内最大の海底炭鉱水没事故であった。この事故は当時の新聞にも大きく報じられ、天皇皇后からも殉職者に対し御下賜金があり、全国からも多くの義援金が集められた<sup>44</sup>。また長生炭鉱近くに位置する新浦炭鉱の事故においても海底採掘研究会の発起により遺族救護会が組織され、宇部市民の義援金が集められた。

長生炭鉱の事故は宇部炭田における東見初に次ぐ大事故であったにもかかわらず、最近までメディアなどに取り上げられることはなかった。このように事故後の対応が異なるのは事故が起こった時期が太平洋戦争開戦後間もなくの事故であり、戦意を低下させたり国家の都合に悪いニュースなどは統制されていたため、大々的な報道が行われていなかったこと、また犠牲者の多くが日本人ではなかったことなどが考えられる。

長生炭鉱が人々に広く知られるところとなるのは炭鉱近くにある西光寺に安置されている位牌のうち長生炭鉱犠牲者の位牌が存在し、また「殉職産業名簿」に記されている名前と一致したからである。位牌に記された人々の名前はすべて創氏改名の時の名であったため、特定が困難であった<sup>45</sup>。だが、千葉県松戸市で「集団渡航鮮人有付記録」が発見され<sup>46</sup>、福岡の寺院に保管されている大日本産業報告会編「殉職産業人名簿」が長生炭鉱の犠牲者を供養している西光寺の位牌と大半の名簿が一致したためその実態が明らかになった<sup>47</sup>。それらの公表（『朝日新聞』平成2年7月16日）でようやく長生炭鉱への強制連行の事実が明らかになり、その悲惨な水没事故で犠牲になった朝鮮人労働者の名前が具体的に判明し始めたのである<sup>48</sup>。

## 5. 長生炭鉱関連者の証言

2007年2月3日の土曜日、宇部海岸で「長生炭鉱の水没事故を歴史に刻む会（代表者は山口武信氏）」の主催で水没事故65周年の追悼式が行われた。その際、韓国からの遺族とともに、当時の炭鉱の生存者二人が参席し、筆者は二日間にわたり、彼らの貴重な証言を取った。その証言と、当時の炭鉱監督をしていた井上正人氏との証言を掻い摘んで述べておきたい。

### ① 薛道術（スル・ドスウル，1918年生まれ，2007年現在，89歳）さん

1938年頃、故郷の派出所に4～5人集められ、釜山からは約70～80人が一緒に船に乗ったが、いきなりヘルメットをかぶらせて小さい船に移動して長生炭鉱へ行くことになった。中には逃亡する人も少なくなかった。仕事はきつかったが一生懸命働いたため、信頼さ



水没事故65周年記念追悼式（撮影 李修京）



れ、給料ももらえたので、借金を返済し、土地を買うこともできた。しかし、後半になると坑夫に現金支給は逃亡のおそれがあるので、金券を代わりにもらうことになった。そのため、炭鉱の閉坑とともに給与は未払いとなった。

1940年当時、三井関連の会社になっていたため、自分は創氏改名で三井ドスルに改名した。事故があった頃は炭鉱の壁面から水が多く漏れていたのが危険性は感じていた。自分は幸い事故からは逃れたが、事故直後に現場に行くと女や子供たちが夫・父を返せと泣き叫んでいた。まもなく憲兵が来て板で坑口を塞いだのを目撃している。

なお、自分は初期の労働者なので給料ももらえて、後に来る人たちの親分のような立場にいた。それに後ろめたさを感じている。

② 金景峯（キム・ギョンボン、1922年生まれ、2007年現在、85歳）さん

1939年の18歳になった頃、強制的に刑事に連行されて下関に行った。ほとんど拉致に近い。日本語も勿論できなかった。下関からいきなりヘルメットを被らせて小舟で長生炭鉱に移動した。1部屋に30人位が生活し、現場では殴る蹴るは日常的で、途中で死んだ人も多かった。自分は金券の時代であったため、初めから終わりまで現金を見たことも、もらったこともない。炭鉱の中の空気は極めて悪く、多くの同僚がコレラに罹って死んで行った。自分もコレラにかかって髪が抜け、死んだと思われて放置されていたが、ドサクサのなかで生き残った。現場と宿所だけを行き来する、社会とは完全に隔離された生活であった。事故当日は仕事を終えて次の当番と交代し、坑口まで来たら事故が起こり、素早く坑口を板で塞ぐのであった。水没事故まもなく現場から逃げ出して自分は八幡製鉄に行って働いたが、紆余曲折で横浜や兵庫県の芦屋に行って働いた。その後、徴集されて軍隊へ行き、敗戦後は帰国し、敬虔なクリスチャンとして余生を過ごしている。日本は過去の不幸を知って2度と悪行をしないで欲しい。僕たちはお金ではなく謝罪が欲しい。



長生炭鉱の水没事故生存者の証言集会（撮影 李修京）

③ 井上正人（いのうえ まさと、1921年生まれ、2007年現在、86歳）さん

早稲田大学文学部出身の井上正人さんとは2006年9月14日と翌年の2月5日の2回にわたるインタビューを行った。その内容を略記すると、井上さんは水没事故の前の1年間を長生炭鉱の労務課で監督として働いた後、水没事故のあった昭和17年の7月10日から久留米の歩兵隊に入隊し、昭和20年8月5日まで働いたという<sup>49</sup>。長生炭鉱について、「朝7時に札返しをして2～3交代で勤務し、週1回休みを取った。さらに、坑口から現場までは往復1時間のところであり、若い女性は洗炭作業を、男性は採石作業を行った。炭鉱の寮には2～300人が生活し、中には部屋を借りて家族単位で出稼ぎにきたケースもあった。映画などがあるとみんなが集まってみた。まともな食生活だとはいえず、狂った時代であっただけに、朝鮮人労働者は酷使された。可哀想なことをやったものだ。」と述べたが、炭鉱を監督した立場からの複雑な沈黙を内在していた

様子が印象深かった。

④ 三井秋憲 (2005年現在, 90歳) さん

挺身隊で何度か坑内に入った経験を持つ三井さんは、「1キロほど沖合の崩落地点で、坑内から空気がゴボゴボと出て、水を噴き上げ取りました。空気がなくなるまで1カ月ほど続いたでしょうか。船から土のうを投げ込んで、穴をふさごうとしていましたが、もう坑口まで水が来ていました。」「この辺りの炭鉱はよくばれて(水没事故が起こることを称す)いました。でも、採掘は軍の命令で、人の死も当たり前とされた時代でした。」「アイゴーという泣き声が住宅に響いていた。」と、事件直後の状況について証言している<sup>50</sup>。



長生炭鉱の坑口, 今は廃墟化 (撮影 李修京)

むすびに

以上、戦時中の炭鉱産業を踏まえつつ、山口県の宇部の炭鉱産業、そして、長生炭鉱の水非常事故について概括してみた。

戦時下の労働者らは異郷での苦しみや搾取だけではなく、危険な仕事による事故に巻き込まれることが多かった。特に炭鉱産業では感電で虐待した足尾銅山や最も多くの朝鮮人労働者の遺骨が散在する九州鉱山、屍体埋まる秋田県の花岡鉱山<sup>51</sup>や北海道の三井砂川炭鉱、山口県の宇部長生炭鉱などでは土木工事作業によって多くの死傷者が生じ、中には今でも遺骨が収容されないで埋められたままのところが多々ある<sup>52</sup>。本稿ではその中でも水非常の事故処理が今なお総括が出来ず、遺族らによる毎年の追悼会行事と朝鮮出身犠牲者の追悼碑要求を続ける山口宇部の長生炭鉱を中心に考察してみた。

1937年7月の日中戦争以来、日本の石炭の需要は急増し、石炭増産需給のために不足する労働力の確保が国家的課題化していくのである。そして、「朝鮮人労働者の内地移入制限の緩和」策が実行される中、1939年7月に平沼騏一郎内閣は「一次労務動員計画」を策定し、「労働力不足への対応処置として、約八万五〇〇〇人の「移入朝鮮人労働者」の強制連行が事実上気一定され(中略)山口県での朝鮮人坑夫募集状況については、同年九月段階で厚生省が許可した「朝鮮人移入許可員数」は六八〇人(東見初一三〇人、本山一〇〇人、長生二五〇人——『近代日本炭礦労働史研究』資料参照)となっている。<sup>53</sup>のであり、中でも多いのが長生炭鉱であった。長生炭鉱には朝鮮総督府に勤めていたという瀧本益雄と江本勝太郎の二人が「募集」係りであったため、朝鮮出身の労働者の確保も他の炭鉱よりも多かったと考えられる<sup>54</sup>。そのため、結果的に朝鮮出身の労働者の犠牲者も多く、その対応策も戦時中の出来事として有耶無耶に済まされてしまい、今なお戦争総括への問題を引き摺っているところがある。



長生炭鉱の追悼碑。朝鮮人労働者名は刻まれていない  
(撮影 李修京)

現在では宇部の市民団体「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」の働きかけにより炭鉱事務所地後に「長生炭鉱受難者之碑」が建てられ（1982年）、毎年、慰霊祭とフィールドワークが開かれている。同会は人道的な立場から、過去の悲惨な事故を風化させないために、炭鉱の悲劇を歴史に記録、強制連行などに対する日本人の反省を込めた慰霊碑の建立、ピーヤの保存、証言や資料の収集などに取り込んでいる。また、同会は01年8月に海に潜って坑道内に入り、遺骨の収集作業を行ったが何も見つからなかった。また、韓国政府も04年、日本による強制連行についての真相究明委員会を発足させ、同年調査団が遺骨調査のため来日し、同炭鉱を訪れている<sup>55</sup>。その実態を知る作業を地道に行っているのだが、戦争の凄惨さ故の劣悪な労働環境での犠牲となった彼らの悔しさを癒す記憶の空間はあまりにも少なすぎるのが現状であり、まして植民地出身者の犠牲を追悼し、記憶する場所が日本には皆無に等しいといっても過言ではなからう。恥の歴史として隠蔽・削除に汲々する一部の動きがあるが、日本の平和的未來社会を永続させる理由をもみ消すことは頭のない胴体を引きずるような矛盾そのものである。国際社会が周知する日本の侵略史の事実を明確にし、国際社会に戦時中の実態を知らしめ、「だから日本は二度と戦争はしない・させない」平和路線を堅持する覚悟を示し、世界的信頼を受けることに率先すること。そのような歴史総括への姿勢に基づく平和大国日本の努力が世界的評価へと繋がるのであり、今後の日本のあり方ではなからうか。それは戦時中の炭鉱産業の犠牲となった多くの人々の願いでもあり、明日を生きる人類の土壌として、教訓として世界に生き続ける歴史となるはずである。

#### 注

- 1 荻野喜弘「1920年代の宇部炭鉱業」『宇部地方史研究第11号』、1983年、1頁。
- 2 『うべ歴史発見』宇部時報社、2002年、254頁参照。
- 3 上掲書、『うべ歴史発見』、261頁。そのほか、高野義祐の『米騒動記』でも関連内容について垣間見ることが出来る。
- 4 上掲書、『うべ歴史発見』、281頁参照。
- 5 1921年12月30日午前10時、海底陥落によって海水侵入し、34名が死亡した。師井易二「西岐波の炭鉱昔あれこれ」『宇部地方史研究第11号』、34頁参照。
- 6 宇部市公式ウェブ。<http://www.city.ube.yamaguchi.jp/left/profile/shoukai/profile.html>

- 7 同上。
- 8 [http://project.lib.keio.ac.jp/dg\\_kul/coal\\_about.html](http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/coal_about.html)
- 9 鮎川伸夫「植民地朝鮮における石炭産業—採炭機構と鉱夫統括を中心に—」『大阪経大論集第54巻第2号』2003年7月, 129頁参照。
- 10 朴慶植「朝鮮人強制連行」朴慶植・山田昭次・梁泰昊共編『朝鮮人強制連行論文集』明石書店, 1993年, 11頁。
- 11 同上。
- 12 田中宏「強制連行」『朝鮮を知る事典』平凡社, 2005年, 72頁参照。
- 13 前掲, 朴慶植「朝鮮人強制連行」, 17~18頁参照。
- 14 金賛汀『証言朝鮮人強制連行』新人物往来社, 1975年, 51頁。
- 15 朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成 第五巻』三一書房, 1976年, 761頁。
- 16 同上参照。
- 17 西村佑二郎・松里英男編『山口県の岩石図鑑』第一学習社, 1991年, 204頁。
- 18 宇部の石炭に関する最も古い文献は俳人松江重頼の『毛吹草』で, 「舟木石炭 千漆ニ似, 当所薪灯用之」と記されている。
- 19 山口県教育庁社会教育課『山口炭田の民俗』山口県教育委員会, 1971年, 13頁参照。
- 20 石炭局は明治3年(1870)に西洋技術を導入するため石炭職人を肥前の鷹島炭鉱に派遣を行ったり, 同年イギリス人モーリスを長崎から呼び寄せ, 技術の指導にあたらせたりした。宇部市史編集委員会『宇部市史 通史篇 下巻』宇部市, 1993年, 868~869頁参照。
- 21 これらの布告により地下の鉱物はすべて国の所有とし, それを採掘する際には政府に出願し, 鉱区権を取得しなければならなくなった。山口においてこの新法にいち早く対応したのが山口藩石炭方の役人であった福井忠次郎らであり, 石炭借地内で斤先料を納めさせ, 採炭稼業させる石炭会社の仕組みを作った。『炭都百年史話』宇部時報社, 1998年, 25~26, 37~39頁参照。
- 22 宇部市史編集委員会『宇部市史 通史篇 下巻』宇部市, 1993, 71頁参照。
- 23 『炭都百年史話』宇部時報社, 1998, 25~26頁参照。
- 24 宇部石炭支局編『山口炭田三百年史』68頁, 表10「生産量の推移」参照。
- 25 上掲『山口炭田の民俗』66頁。
- 26 上掲, 『山口炭田の民俗』69頁, 表18「出炭の推移」参照。
- 27 上掲, 『山口炭田三百年史』, 表110頁, 表25「炭鉱労務者, 構成別推移」参照。
- 28 朝日新聞宇部支局編『宇部石炭史話』朝日文化センター, 1981年, 238~240頁参照。
- 29 日本の朝鮮植民地支配の時期, 在日朝鮮人に対する内務省, 警察当局を中心とした統制機関であった協和会の統括機関として結成された。同化政策や戦争遂行に必要な労働力, 軍人軍属への動員に協力させ, その思想, 行動を監視し民族的なものいっさいを抹殺・弾圧する警察行政の一翼を担った。44年11月, 不利な戦局に対処して協和会を強化するため興生会と改称。朴慶植「協和会」『朝鮮を知る事典』平凡社, 1986年, 74~75頁参照。
- 30 上掲, 『宇部市史 通史篇 下巻』670~674頁。
- 31 後に宇部興産株式会社となる会社の礎を築いた渡辺祐策の死後, 文化事業を目的とした財団法人「渡辺翁記念文化協会」が発足される(昭和11年12月)。その一環として昭和12年5月から月刊誌「大宇部」が発刊された。「大宇部」は毎月10日に発行されるタブロイド判で, 年間10回の普通号と2回の特別号を出版。紙面では特に協会発足の敬意や渡辺を追慕し, 遺徳をたたえる記事が多く掲載されている。昭和19年6月, 逼迫する戦時下での発行は困難となり, 廃刊となる。
- 32 崔承喜(チェ・スンヒ 1913~1986) 朝鮮の女性舞踊家。民族舞踊の伝統美を生かした現代舞踊『エヘヤ・ノアラ』『石窟庵の菩薩』などで名を馳せ, 30年代から朝鮮はもとより日本, 欧米, 中国の各地で公演。1945年の朝鮮解放後は北朝鮮で活躍し, 朝鮮舞踊家同盟中央委員長, 国旗勲章第一級受賞等。宮田浩人編『復刻戦ふ朝鮮』新幹社, 2007年, 152頁。
- 33 高野義祐『新川から宇部へ』ウベニチ新聞社, 1953年, 175頁参照。

- 34 前掲, 179頁。
- 35 宇部においては沖ノ山炭鉱夫の賃金値上げ交渉がきっかけとなり、大正7年8月17日夜騒動が発生する。その翌日には山口42連隊が出動、発砲により13人の犠牲者を出し、ようやく事態は鎮静化した。騒動後、抗夫は逮捕を恐れ、炭鉱には戻らなかった為、炭鉱では操業ができないほどであった。
- 36 上掲、『宇部市史通史編下巻』678頁参照。
- 37 『十年誌』西部石炭鉱業聯盟, 1953, 79頁。
- 38 山口県朝鮮人強制連行真相調査団編『続・朝鮮人強制連行調査の記録』山口県朝鮮人強制連行真相調査団, 1995年, 41頁参照。
- 39 朝鮮人強制連行調査団編『朝鮮人強制連行調査の記録 中国編』柏書房, 2001, 35頁。
- 40 上掲, 師井易二「西岐波の炭鉱昔あれこれ」, 34頁参照。
- 41 『山口炭田三百年史』広島通商産業局 宇部石炭支局, 1969, 97頁参照。
- 42 山口武信「1942年 長生炭鉱“水非常”ノート(Ⅱ)」『宇部地方史研究第19号』宇部地方史研究編, 1991年, 17頁参照。
- 43 2006年9月14日に筆者たちが訪ねた炭鉱近くの重藤文江さん(大正5年生まれ, 2006年現在91歳)の証言による。山口の女学校を出て山口銀行の行員と結婚して炭鉱の近くに嫁いだのだが、朝鮮の人から野菜などを分けてほしいとしばしば言われたと回想していた。
- 44 『うべ歴史発見』宇部時報社, 2002, 59頁参照。
- 45 山口武信「炭鉱における非常—昭和17年長生炭鉱災害に関するノート」『宇部地方史研究第5号』宇部地方史研究編, 1976年, 31頁参照。
- 46 「朝日新聞」1990, 7月7日
- 47 「朝日新聞」1990, 7月16日
- 48 宇部市史編集委員会編『宇部市史 通史編 下巻』宇部市, 1993年, 674頁。
- 49 長生炭鉱の水没事故究明を追究してきた『新東亜』によれば、井上正人の父親が長生炭鉱の労務責任者であり、事故当時、井上は憲兵隊に勤務中であったため、長生の管轄庁であった九州保安石炭局から派遣され、長生炭鉱の事故処理を担ったことになっている。確かに井上本人も父親が長生で働いていたことは述べていたが、事故処理に関することについては筆者には語っていない。ただ、このことから長生炭鉱に軍が関与していることは明確だと言えよう。李ジョンホァン「日本長生炭鉱海底墓の悲劇」『新東亜』公式ウェブ参照。[http://www.donga.com/fbin/new\\_donga?d=9705&f=nd97050150.html](http://www.donga.com/fbin/new_donga?d=9705&f=nd97050150.html)
- 50 三井秋憲「戦後60年フォト・ルポ 山口・長生炭鉱「強制連行」水没事件」『サンデー毎日』2005年, 5月8日・15日合併号より。
- 51 これらに関しては次の文献から詳細を確認することができる。朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』未来社, 1992年, 156~216頁参照。
- 52 『東亜日報』日本版公式ウェブ。<http://japan.donga.com/srv/service.php3?biid=2006022000418>
- 53 山口武信「現地調査の記録」朝鮮人強制連行真相調査団編『朝鮮人強制連行調査の記録 中国編』柏書房, 2001年, 63頁。
- 54 上掲, 山口武信「現地調査の記録」, 69頁参照。
- 55 「朝日新聞」2005, 6月11日

#### 【参考文献】

- 宇部市史編集委員会編『宇部市史 通史編 下巻』宇部市, 1993年  
『炭都百年史話』宇部時報社, 1998年。  
『うべ歴史発見』宇部時報社, 2002年。  
大田勝『炭都発展の経済史』宇部時報社, 1997年。  
黒木甫『ふるさと歴史散歩』宇部時報社, 1994年。  
金賛汀『証言朝鮮人強制連行』新人物往来社, 1975年。

高野義祐『新川から宇部へ』ウベニチ新聞社, 1953年。

『朝鮮を知る事典』平凡社, 1986年。

朴慶植・山田昭次・梁泰昊共編『朝鮮人強制連行論文集成』明石書店, 1993年。

朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』未来社, 1992年。

朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成 第五巻』三一書房, 1976年。

西村佑二郎・松里英男編『山口県の岩石図鑑』第一学習社, 1991年。

山口県教育庁社会教育課『山口炭田の民俗』山口県教育委員会, 1971年。

朝鮮人強制連行真相調査団編『朝鮮人強制連行調査の記録 中国編』柏書房, 2001年

『続・朝鮮人強制連行調査の記録』山口県朝鮮人強制連行真相調査団, 1995年。

朝鮮人強制連行調査団編『朝鮮人強制連行調査の記録 中国編』柏書房, 2001年。

『山口炭田三百年史』広島通商産業局 宇部石炭支局, 1969年。

山口県教育庁社会教育課『山口炭田の民俗』山口県教育委員会, 1971年。

朝日新聞宇部支局編『宇部石炭史話』朝日文化センター, 1981年。

宇部市史編集委員会『宇部市史 通史篇 上巻』宇部市, 1992年。

宇部市史編集委員会『宇部市史 通史篇 下巻』宇部市, 1993年。

渡辺祐策『宇部産業史』渡辺翁記念文化協会, 1953年。

炭鉱写真編集委員会『有限無限へ 炭鉱』宇部市, 1998年。

『十年誌』西部石炭鉱業聯盟, 1953年。

岩澤榮「宇部炭田に於ける海底炭層の開発と保安について」宇部興産, 1953年。

鮎川伸夫「植民地朝鮮における石炭産業—採炭機構と鉱夫統括を中心の一」『大阪経大論集第54巻第2号』2003年7月号。

荻野喜弘「1920年代の宇部炭鉱業」『宇部地方史研究第11号』, 1983年。

山口武信「炭鉱における非常—昭和17年長生炭鉱災害に関するノート」『宇部地方史研究第5号』宇部地方史研究編, 1976年。

山口武信「1942年 長生炭鉱 “水非常” ノート (Ⅱ)」『宇部地方史研究第19号』宇部地方史研究編, 1991年。

山口武信「長生炭鉱 水非常についてⅢ」『宇部地方史研究第25号』宇部地方史研究編, 1997年。

布引宏「長生炭鉱の「集団渡航鮮人付記録」を読む」『宇部地方史研究第19号』宇部地方史研究編, 1991年。

布引宏「長生炭鉱犠牲者名簿の総合」『宇部地方史研究第19号』宇部地方史研究編, 1991年。

宮田浩人編『復刻 戦ふ朝鮮』新幹社, 2007年。

関連インターネットサイト：

[http://www.donga.com/fbin/new\\_donga?d=9705&f=nd97050150.htm](http://www.donga.com/fbin/new_donga?d=9705&f=nd97050150.htm)

<http://www1.korea-np.co.jp/sinboj/j-2007/01/0701j0524-00002.htm>

<http://media.paran.com/snews/newsview.php?dirnews=268930&year=2007>

宇部市公式ウェブ

<http://www.city.ube.yamaguchi.jp/left/profile/shoukai/profile.html>

[http://project.lib.keio.ac.jp/dg\\_kul/coal\\_about.html](http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/coal_about.html)

附記：本稿は小池美晴（山口市立中央図書館在職）さんの多大な協力を受けてこそ纏めることができた。資料収集から関連者とのインタビュー設定など、限らない協調に深く感謝の辞を記しておきたい。また、「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」の山口武信代表、宇部琴芝校区自治会連合会の村島靖彦会長、山口県立大学の井竿富雄先生、そして、証言や写真撮影を快く応じて下さった生存者方々など、多くの方々のご協力にも感謝し、ここに謝辞を記しておく。

## 宇部の長生炭鉱と戦時中の朝鮮人労働者

### The Cho-Sei coal mine in Ube under WW II , and Chosen labors

李 修京, 湯野 優子

YI Sookyung, YUNO Yuko

外国語・外国文化研究講座\*

#### 要旨

日中戦争の勃発後、戦争の長期化・激化によって多くの日本人が戦場に駆り立てられ、戦時労働力の不足は植民地、とりわけ朝鮮人労働者などで補充された。その際、山口県は大陸への玄関口と言われ、宇部市は朝鮮半島と近い臨海炭鉱地という地理的条件から炭鉱の活性化が促進されたところであり、朝鮮からの戦時労働者も多く動員・配置されたところである。そして、劣悪な炭鉱環境の中で多くの朝鮮人労働者が犠牲となった。本稿では宇部市の炭鉱の中でも水非常事故によって現在も遺族への遺骨返還が行われていない長生炭鉱を中心に考察し、戦争の実状と非人道的事故処理について検証してみる。

山口県吉敷郡西岐波村1456番地に所在した長生炭鉱は1914年に礒辺啓作によって開鉱された海底炭田だが、後の1940年に山田新松に引き継がれ、頼尊淵之助によって経営されるようになった。炭鉱は新浦炭鉱の海岸沿いの南に位置した。最盛期の昭和15年には992人が働き、15.3万トンの石炭を産出した中規模の炭鉱であった。また、朝鮮人労働者が多いことから「朝鮮炭鉱」とも呼ばれていた。しかし、1942年2月3日午前、海底陥落による海水侵入で183人（中で133人は朝鮮からの労働者で、多くの労働者の給与は現金よりも金券であった）の労働者が海底に埋もれてしまった。当時の炭鉱の中でも長生炭鉱は不安定な基盤に海底炭鉱を設けていたが、その背景にはそもそも問題が多い炭鉱環境があった。本稿ではそういった炭鉱問題と事故処理、今でも総括できない現状を分析し、現代に生きる我々の視点から過去の戦時中の歴史を再考する。

---

\* Department of Humanities & Social Science